

称号及び氏名	博士（言語文化学）	加藤 雄一
学位授与の日付	2019年3月31日	
論文名	『伊勢集』の研究	
論文審査委員	主査	青木 賜鶴子
	副査	田中 宗博
	副査	西田 正宏

論文要旨

『伊勢集』には同一祖本から派生したとされる三系統の諸本が存在し、最古写本である西本願寺本『伊勢集』を中心に読解がなされてきた。しかし、諸本間の本文異同は混沌としており、どの本文を用いるかによって、歌の解釈が大きく左右されることもある。そこで、本論文では、従来の研究において、あまり用いられることのなかった定家本『伊勢集』の性格とその意義を明らかにするとともに、同時代歌人の歌や娘の中務の歌と比較しながら伊勢の歌が持つ表現の特徴を解明することを目的とする。

第一章「研究史概観」では、現在に至るまでの『伊勢集』並びに歌人伊勢についての研究を、伝記研究・諸本研究・表現研究・「伊勢日記」の研究・その他の研究の五つに分類して、その成果をまとめた。また、これまでに発表された『伊勢集』に関連した論文の一覧を付した。

第二章「定家本『伊勢集』考」は、定家本と西本願寺本の本文異同を通じて、これまで考察の対象となる機会が殆どなかった定家本の性格の一端を明らかにした。

第一節「定家本の本文」では、定家本と西本願寺本の概要をまとめ、最古写本とされる西本願寺本にも既に後人の手が入った痕跡があることを指摘した。一方、定家本には、天暦五（951）年に創建された醍醐寺五重塔初層天井板に書き残された伊勢の歌と酷似する本文があり、定家本の本文が天暦期まで遡ることができることを指摘した。さらに、解釈上、西本願寺本の本文よりも意味が通りやすく、内容的にも優れていることを論じた。

第二節「西本願寺本との本文異同（一）—『後撰集』との関係から—」では、一つの歌が、『後撰集』、西本願寺本『伊勢集』、定家本『伊勢集』に重出する場合を取り上げ、『伊勢集』内の諸本、あるいは『後撰集』内の諸本により良い本文がある場合に限って校訂する姿勢であることを指摘した。

第三節「西本願寺本との本文異同（二）—定家本の書写態度—」では、前章を受け、西本願寺本と定家本の異同に焦点を絞って考察を行った。その結果、文法的・語法的には定家本

が正しく、西本願寺本は正しくない場合が見られるが、その逆はないこと、定家本の校訂は第二節と同様に、諸本により良い本文がある場合に限られることがわかった。つまり定家本の本文は書写者が勝手に書き換えることはしないことから、そのような本文がその当時に存在していたことをうかがい知ることが可能であり、そこに定家本の有用性があることを指摘した。

第四節「詞書「あるところに」をめぐって」では、他系統本には見出せない「あるところに」という詞書が定家本系統の本文には3箇所も出現することを指摘し、その要因を考察した。「あるところに」という詞書は、「ある貴人に献上した歌」という意味合いで用いられるのが一般的ではあるが、定家本に見らる3箇所の「あるところに」は、全て具体的な場所や、詠歌状況の説明が続き、不審であることを述べた。これは当初、詠歌事情が未詳であったか、或いは、意図的に臙化させた歌に付された詞書ではなかったかと考えられる。そこに後人が、別種の『伊勢集』から詠歌事情を書き入れた注記や、歌の内容から勘案して新たに書き添えた詞書が混入して、現在見られる詞書が出来上がったのではないかと推察した。よって、「あるところに」という詞書自体は古態性を有するものであると指摘した。

第五節「所謂「伊勢日記」の解釈をめぐって」では、「伊勢日記」が実名を用いず「男・女」で語られるにもかかわらず、定家本にも、西本願寺本にも、「びはのおとど」という人物を特定できる呼び方が詞書の中に現れる点に注目して考察を行った。伊勢の物語として成立させる上で必要な歌を余白に書き留めておいたものが、定家本と西本願寺本に分かれた後、歌を組み込む過程において注記が紛れ込んだものではないかと指摘した。問題の箇所は、定家本と西本願寺本では詞書が大きく異なり、これは書写者がどれだけ積極的に介入してくるかによるものであり、その結果、定家本は西本願寺本に比べて、和歌に精通した者の手によって担われ、書写されてきた本であったことを論じた。

第三章「伊勢の歌表現考」では、伊勢の作歌姿勢と、生み出される特有の表現について考察を行った。

第一節「伊勢と躬恒」では、伊勢の歌と共通する表現が多く見られる躬恒を取り上げ、両者を比較しながら摂取の先後関係や、歌作りの手法の共通性を考察した。その結果、『古今集』以降継承される表現の先駆的なものは、伊勢と躬恒の二人から創出されることが多いことを指摘し、こうした最新の表現は双方向的に構築されたものだと考えられることから、互いの歌を享受し合う現場が想定されるのではないかという考えを述べた。

第二節「伊勢と貫之」では、『古今集』撰者の中心人物として歌壇を牽引する貫之に焦点を当てて、両者の歌表現を比較しながら、その特徴を考察した。その結果、古今集時代に歌材としてよく用いられるものや、古今的表現の特徴の一つである見立ての技法を駆使したものなど、規範的な枠組みの中で詠出された歌が目立つが、詳細に検証してみると、用いる言葉や発想の基軸は同一でも各々創意工夫が施され、独自性を主張していこうとする作歌姿勢がうかがえることを指摘した。伊勢と貫之の間にも共通した表現が見いだせるのは、躬恒と同様に両者にも交流する場があったことを想定させると述べた。

第三節「伊勢の「涙」詠について」では、伊勢が和歌の中に頻繁に用いた歌語の一つである「涙」に注目して、伊勢がどのように「涙」を詠みこなし、新しい表現を開拓したかを考察した。その一例として、「涙に溺れる」や「涙が果てる」などの誇張表現に際立った特徴を見出すことができ、後世に詠み継がれる表現であることを指摘した。

第四節「伊勢と中務—表現の継承について—」では、まず『伊勢集』『中務集』に重出する歌が、伊勢作か、中務作かを考察した。次に両者の歌には共通する表現が少なからず存することから、娘の中務が、母の歌のどのような点に関心を抱き、自らの和歌作法に取り入れていったのかという過程を考察した。その結果、単純な再利用に留まることなく、中務独自の表現へと昇華させていく様相がうかがえる点を指摘した。

以上の考察から、定家本『伊勢集』の性格の一端と本文の有用性を明らかにした。また、伊勢が詠み出す新しい表現の一つには、躬恒や貫之との交流によって生み出されていった蓋然性が高いことを指摘し、これまでに殆ど顧みられることのなかった伊勢と当代歌人との双方向の影響関係を明らかにした。

最後に、定家本『伊勢集』に準拠した形で、歌順一覧を付した。

学位論文審査結果の要旨

言語文化学専攻（分野）の論文審査基準に従って、審査結果を述べる。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、平安時代の女性歌人伊勢の和歌に関する研究である。伊勢は、宇多天皇の中宮藤原温子に仕え、歌合や屏風歌などの晴の場での歌を多く残したほか、醍醐天皇の命で編纂された最初の勅撰和歌集『古今和歌集』に女性としては最多の歌が採られるなど、宇多・醍醐朝歌壇を代表する女性歌人といってよい。本論文は、『古今和歌集』時代の歌壇の動向を見据えつつ、伊勢の家集『伊勢集』に焦点を当てて論じており、研究テーマが絞り込まれている。

2) 研究の方法論が明確である。

本論文は、『伊勢集』を対象として、伝本研究と表現研究の面から考察を加えたものである。まず『伊勢集』の代表的な二系統の伝本について、本文の丁寧な比較と分析から、その本文の成り立ちと意義を論じ、次に、伊勢の歌の表現について、同時代及びそれ以降の和歌との比較から、伊勢の歌の表現上の特色とその影響を明らかにしようとしている。これは、古典文学研究において、きわめて正統的な研究方法である。

3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

『古今和歌集』時代の歌人とその表現については膨大な先行研究があり、伊勢もその例外ではない。本論文では、第一章において伊勢にかかわる先行研究をまとめ、伝記研究・諸本研究・表現研究等における問題点を指摘したうえで以降の論を展開しており、論文の随所において先行研究の知見が踏まえられている。

4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文は三章から成る。第一章では前述のごとく論点ごとに先行研究をまとめ、『伊勢集』及び伊勢の和歌研究における問題点を浮き彫りにしている。第二章は伝本研究であり、従来研究の中心であった西本願寺本と、定家本（藤原定家が監督書写した本）の本文とを丁寧に比較検討して、定家本の性格の一端を明らかにしている。第三章は表現研究であり、同時代歌人の紀貫之・凡河内躬恒と伊勢に共通する特徴的な表現を分析し、『古今和歌集』時代を牽引する歌人として、貫之・躬恒とともに伊勢にも注目すべきことを論じている。いずれも用例の比較・分析に基づく堅実な論である。

5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

本論文第二章では、最古の写本である西本願寺本と定家本の本文を丁寧に比較していくことで、定家本にも古態を残す部分があることを指摘し、西本願寺本だけではわからなかった『伊勢集』の構造が明らかになると指摘している。約500首ある『伊勢集』の全体にわたって比較すること自体が画期的である上に、特に「わたつみ」と「わたつうみ」の分析など、定家本の意義を再確認した点は評価でき、『伊勢集』の伝本研究に一石を投じるものと言える。第三章については、『古今和歌集』時代の主要歌人として注

目されてきた貫之・躬恒と伊勢との共通表現に注目した論は他になく、独創性を備えた内容である。また巻末に付された諸本歌順一覧は、改善の余地はあるものの、定家本の歌順を基準にしたものは他になく、有益と認められる。

以上を総合して、本論文は、博士学位論文として必要十分な内容を備えており、博士（言語文化学）の学位を授与するに値するものであると審査委員会は判断した。